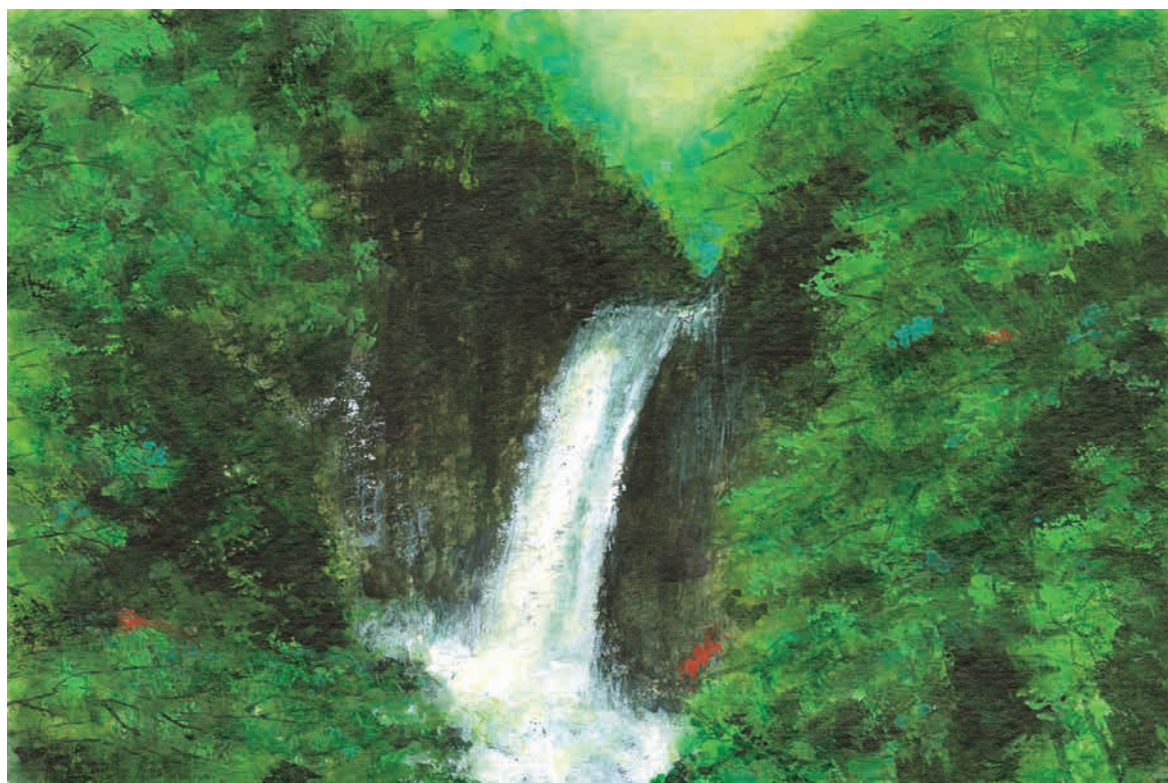


人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくり in ほくりく



絵 三輪 ひろ子

「苗名滝 夏の中に」

新潟と長野の県境にある苗名滝は、関川にかかる滝です。地響きを立てて55メートルの落差を流れ落ちる様は、地震滝とも呼ばれ、夏には轟音とともに涼を届けてくれます。

2022 SUMMER

- 第10回定時総会報告 2
- 特別寄稿 4
 - 「地域型芸術祭」が育むもの
園田 清佳(信濃毎日新聞社文化部 記者)
- シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」 8
 - 会津若松市で実現するデジタル田園都市
海老原 城一((一社)スーパーシティAICTコンソーシアム 代表理事)
- 北陸再発見 12
 - 絶景は大地の躍動～佐渡ジオパークを歩こう
- 特集「地域とともに」 16
 - ありがとうシェアリング
大学生が地域の困りごとを「ありがとう」に変える
坂村 圭(NPO法人オリヅルプロジェクト理事)
- 会員だより 22
- 伝言板 24

第10回定時総会開催報告

去る6月15日、第10回定時総会をANAクラウンプラザホテル新潟において開催しました。当日は、会員676名中、556名（委任状提出者385名含む）の出席をいただきました。新入会員は22名です。

理事長挨拶

北陸地域づくり協会の第10回の節目を迎える定時総会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

会員の皆様には、この10年間、当協会の運営に対し多大なご支援とご協力を賜り、心より感謝を申し上げます。

本日の定時総会はコロナ禍の中における開催となりますが、大変多くの皆様よりご出席頂きありがとうございます。例年建設北陸会との合同開催としておりますが、新型コロナウイルス



挨拶する近藤理事長

感染症拡大防止の観点から会員相互の交流の場をもうけるには至りませんでした。残念ではありますが、ご理解賜りたく存じます。

本日の出席者は171名で、主催者の予想を上回り、例年の約7割となりました。お集まりの皆さまに御礼申し上げます。

北陸建設弘済会から北陸地域づくり協会へ移行した頃を振り返ると、「コンクリートから人へ」に象徴されるような批判の中、会員の皆さまや会の職員にも混乱の時期がありました。ちょうど移行の準備をしているさなかに「東日本大震災」が発生し、それが国土強靱化や防災減災の流れとなり、度重なる広域災害、激甚災害における関係者の努力がインフラの信頼回復につながってきたと感じています。

さて、コロナ禍において様々な制約を余儀なくされましたが、私たちは様々なことを経験し、また新たなことも進展してきました。

例えば、地域限定の商品券や旅行の県民割、最近では隣接県にもこれが拡大し、自分たちが住んでいる地域の良さに気づき直すきっかけになったのではないのでしょうか。

インフラ関係に目を向ければ、県を跨ぎ流域全体を守る治水事業、広域的なネットワークをつなぐ道路整備、過密ではない地方の良さを活かしたまちづくり等にたずさわる者にとっても、ようやく出番が来たように思います。

また、デジタル化のスピードもコロナ禍が後押ししている感があります。在宅勤務、TV会議、ウェブによる講演会、買い物や食事をしてでも電子決済の方が接触機会もなく、いつのまにかレジでも喜ばれるようになってきました。

インフラ分野においてもDXの導入はめざましく、測量設計、建設現場、維持管理など各段階のデジタル化が品質の向上、生産性向上、働き方改革、担い手確保、脱炭素社会に役立ってきています。

さらには危機管理DXや防災DXなどという言葉も使われるようになっており、防災減災分野でも期待が高まっています。

今後はさらに人工知能や仮想現実の技術が進展すると思いますが、一方で、自分の五感を働かせた経験、対面でしか得られない第六感を見逃してはならないと思います。

会員の皆さまが長年にわたり肌感覚で培ってきた経験と知識による「技術の伝承」と「防災エキスパート活動」は、引き続き当協会の二本柱です。

また、対面による親睦や交流、現場見学を始めとした健康的な野外活動なども工夫して運営したいと考えております。

10年の節目にあたり、「北陸地域づくり協会」の名にふさわしい一般社団法人として北陸地域の発展に貢献するよう務めます。引き続き会員の皆様のご支援とご協力をお願いし、開会のご挨拶といたします。

議事

続いて、祝電披露の後、高島専務理事から令和3年度事業報告及び公益目的支出計画実施報告があり、第1号議案「令和3年度決算承認の件」が審議され、異議なく承認されました。



さらに、第2号議案「役員選任の件」が審議され、異議なく承認されました。

特別講演

◆講師 露の団姫氏(落語家・天台宗僧侶)

◆演題「落語家 まるこの仏道修行」

出囃子にのって、年間250席以上の高座と仏教のPRを両立し全国を奔走する異色の落語家、露の団姫氏が登場。



高座を務める露の団姫氏

落語は、300年ほど前、お坊さんが布教しようとしても、なかなか話を聞いてもらえないので、おもしろおかしく話をしたのがはじまり。「頭の準備体操」で、徐々にみんなの頭も柔らかくなり、会場に笑い声が響くようになり、赤ちゃんに呼ばれた家族が次々に亡くなる怪談話「呪いの赤ちゃん」の小咄をまじえた枕に始まり、演目「地獄めぐり」が披露されました。

後半は、講演。3歳で祖父と死別してから、「人間は死んだらどこへ行くのか」と疑問を持つようになった。高校に入り「答えは宗教にあるのではないかと、教書を次々と読破し、仏教の道に進みたいと思うようになった。

その後、新しい役員による理事会が開催され、下表の体制が発表されました。

役員と体制

理事長	近藤 淳	(再任・常勤)
専務理事	高島 和夫	(再任・常勤)
理事	加藤 昭悦	(再任・非常勤)
	柴山 圭一	(再任・非常勤)
	鈴木 聖二	(再任・非常勤)
監事	高山 純一	(新任・非常勤)
	本田 信男	(新任・非常勤)
	丸山 暉彦	(再任・非常勤)

最後に、第11回定時総会を令和5年6月15日(木)に開催することを確認し、総会を終了しました。

一方で、小さい頃からの「落語家になりたい」という夢も捨てきれず悩む中で「中道」という2つの道の真意を理解し、自分で新しい道をつくり進む、落語と仏教の「二刀流」で歩むことにした。

高校を卒業し、露の団四郎に入門、住込みの弟子として修行を開始。師匠の通院、送り迎え、付き添いなども務め「介護要員」というあだ名をつけられながら、深夜1時に寝て朝4時に起き稽古をするという毎日が3年続いた。

25歳から、比叡山で4年間修行。「一隅を照らす これすなわち国宝なり」という「一人ひとりが社会の片隅で一生懸命努力し輝くことで、世の中が明るくなる」などの教を学んだ。一隅を照らす人間になるには、まず自分自身の私生活を整え、そして地域社会に貢献していかなければならないと結んでいた。



◆プロフィール

1986年生まれ。上方落語協会所属の落語家。主に古典落語・自作の仏教落語に取り組んでいる。2011年天台宗で得度、2012年天台僧となる。2021年、落語で心の悩みを癒やす場「天台宗不軽山道心寺」を尼崎市に開山。

「地域型芸術祭」が育むもの



そのだ さやか
園田 清佳

信濃毎日新聞社文化部 記者

1978年、東京都生まれ。東京芸術大学芸術学科卒。2001年、信濃毎日新聞社入社。諏訪支社、文化部、報道部社会グループ記者などを経て22年4月から文化部デスク。新聞連載をまとめた単著に「草間彌生 前衛の軌跡」(信濃毎日新聞社)。共著に「不妊治療と出生前診断 温かな手で」(講談社文庫)など。

■ なにもない、が生む豊かさ

「ここはなんもねーっすけ」。

2000年はじめ、東京芸術大学4年生だった私が、第1回開催を控えた「大地の芸術祭」に招待されたプロジェクトの担い手として、新潟県東頸城郡松代町(当時)を訪ねた頃によく耳にした言葉だ。展示場所が用意されているわけでもなく、土地勘もない私たちが途方に暮れる中、人々ののんびりとした言葉に、生まれも育ちも東京の私が、何度ほっとさせられたか分からない。

当時、私は同じ大学の学生などと『時の蘇生』柿の木プロジェクト」というアートプロジェクトを進めていた。1945年8月9日、長崎市で原子爆弾により被爆した1本の柿の木。その木から生まれた2世木を世界中に広げ、触れてもらうことで平和を思い、アート表現をしながら育ててもらおうという願いを込めたものだ。枯死寸前の1世木を治療した後、2世木を育て、子どもたちに配っていた長崎県の樹木医海老沼正幸さん。その活動に感銘を受けた現代アーティストの宮島達男さんが発起人となり、1995年から取り組んでいる。

松代町でも、この2世木を植えて、思いをつなげて行ってほしいと、地元で説明に回った。

これまでの活動を映像や写真で紹介し理解を広げる拠点として、人々が集う空き家を探していたところ1人の女性が「うちでやったら」と声を掛けてくれた。地元の小学校に勤める教頭

先生で、かねてより地域の子どもたちやお年寄りが楽しめる場を作りたいと考えており、自分の住む集落で展示を勧めてくれた。「部屋も布団もいっぱいあるから」。そんな驚くような理由で気やすく受け入れてもらった私たちはホームステイしながら展示を準備することになった。

高校生から大人まで、地元有志が手伝ってくれて、空き家の壁を一緒にペンキで塗ったり、庭の草を抜いたり。せめてものお礼に手作りの食事(材料の多くは毎日のように近所から届けられる野菜なのだが)を囲む日々。コンビニやファストフード店、ショッピングセンターはもろろんない。電車やバスの便も悪く、夜も早くから暗闇と静けさに包まれる。だからこそ、世代を越えて、楽しむ場も集う場も、自分たちで見つけ、作り出そうとする。そんな営みがむしろとても豊かに思われた。

準備を始めて会期が終わるまで、松代がよいは半年に及んだ。右も左も分からなかった土地は、会いたい人たちがいる、そんなふるさとのような場所になった。続々と現地入りしたプロジェクトメンバーも、地元の人たちとの触れ合いを楽しんだ。

芸術祭がなければ出会わなかったであろう人たちと時間をともにし、「何もないところ」でたくましく生きる人たちにもっと出会いたくて、芸術祭が終わった翌年、地方新聞社に入社した。

■土地との出会い、新しい観光の形に

私の個人的な進路選択に深く関わった「越後^{えちご}妻有^{つまり} 大地の芸術祭」。3年ごとに開かれる祭典は今年8回目を迎えた。十日町市と中魚沼郡にまたがる広大な里山全体を舞台にした現代美術展は、国内の「地域型芸術祭」の草分けとされている。豪雪地帯に特徴的な天井の高い古民家に一歩立ち入ると、暗闇の中にスモークが立ち上る。昔ながらの木造校舎の外壁からは、手足を広げたカラフルな人形が突き出している。新鮮な驚きを求めて鑑賞に訪れた人たちはガイドマップを片手に、脇道に入ったり、峠を越えたりして、作品の魅力に促されて山村に深く分け入っていく。



清津峡溪谷の景観を幻想的に写し出す

大地の芸術祭「Tunnel of Light」(2022年5月撮影)

前衛的で難解といったイメージも持たれる現代アートを、なぜ地方の里山で展開するのか。初回から総合ディレクターを務めるアートディレクターの北川フラムさん（上越市出身）は「アーティストには場を発見する力、それを伝える力がある」と説明する。現存作家がその地域の暮らし、景色、文化、歴史と出会い、その場にふさわしい作品を制作することで、観客は作品を通して地域の魅力や課題に触れることができるのだ。たとえば、棚田を背景にした作品を見て、作品よりも棚田の美しさに目を奪われる。普通の観光では決して訪れないような集落に、作品を見るために足を踏み入れ、その土地の暮らしぶりを体感する。既に人が離れた地にも、かつて人々の営みがあったことを知る一。



前衛芸術家草間彌生^{くさまやよい}さんの野外彫刻と苗代が競演

大地の芸術祭
「花咲ける妻有」
(2022年5月撮影)

一過性の観光では味わえない土地との出会いが、新しい観光として市民権を得つつあるようだ。限られたアートファンが中心だった観客は、回を追うごとに増え、初回の16万人余から、前回（18年）は54万人と過去最多を記録した。会期中は日程や場所により過密状況も生まれてきて、今回は新型コロナ禍での分散来場も狙いに、半年近いロングランに踏み切ったという。

■広がる芸術祭、地域活性化に熱視線

過疎地域への誘客につなげた大地の芸術祭に続けとばかりに、新たな地域振興策として芸術祭は全国各地に広まった。瀬戸内海の島々が舞台の「瀬戸内国際芸術祭」や、北信越でも石川県^{イナ}珠洲市で「奥能登国際芸術祭」、私の住む長野県で「北アルプス国際芸術祭」（大町市）が開かれ、愛知、札幌など都市部で開かれるものを含めると、その数は大小100を超えるとも言われている。

特に、地方を舞台とした地域型芸術祭は「地域の活性化」、引いては新しい観光資源としての経済効果や人口減少を食い止める起爆剤として注目されるようになった。もともと大地の芸術祭自体が政府主導で行われた全国市町村の「平成の大合併」を見据え、新潟県が広域市町村圏ごとの地域づくりを目指す「ニューにいがた里創プラン」の一環で取り組まれた経緯があり、こうした効果が期待されるのはやむを得ない面がある。

なぜ地方が「地域型芸術祭」に希望を見出すのか。その内実は、私が地方紙の一記者として取材し、実感してきた「地方の疲弊」と無関係ではない。

全国の都道府県の中で比較的、合併が進まなかった長野県でも町村部が直面する現実は甘いものではなかった。地域産業の衰退と若年層の流出、少子高齢化一。人口が減少すると次は公共交通など地域インフラの維持が困難となり、住民サービスも細っていく。自主財源は乏しく、交付税への依存度は増していった。



台風で破損し、現在は見られない草間作品一場所で見え方は変わる
.....
瀬戸内国際芸術祭の開かれる香川県直島にあった「南瓜(かぼちゃ)」(2008年撮影)

さらに合併して周縁部となった地域では、住民の声も届きにくくなる。人々の暮らしは変わらずあるのに、地域の「顔」が薄れていく歯がゆさ。そんな地域のアイデンティティーを取り戻すひとつの手段として、芸術祭が希求されている。

■ アイデンティティー、見つめ直す住民

2017年に「北アルプス国際芸術祭」が開かれた長野県大町市は、県内のなかでも観光資源に恵まれた景勝地。それなりに観光客が訪れる地域であり、芸術祭は新たな呼び水として利用されるだけではないかと内心危ぶんだが、それは一面的な見方であった。

このとき、気をはいたのは、平成の大合併で同市の周縁部となった旧・北安曇郡八坂村。大町温泉郷や仁科三湖といった市内の観光地から遠く離れ、経由地にもならない場所で、ロシア

人作家が特産の竹に目を付け作品の材料としたことで地元が盛り上がった。かつては松本藩が管理し、松本城の築城にも使われたという高さ15メートルを超える大竹。竹の性質をよく知る住民が、しならせて巨大な波を表現したい作家にアドバイス。率先して作品づくりに関わり、見事に完成させた。

住民有志は会期中も自主的に、作品のそばで休憩所を運営し、冷たいお茶や手作りの漬物などをふるまった。合併で悲哀を味わった地域に再び、活力が戻ったように感じた。



北アルプスと大町市街の見晴らしに出会う仕掛け
.....
北アルプス国際芸術祭「信濃大町実景舎」(2017年撮影)

一方、公募作家の1組に選ばれた地元女性有志「YAMANBA(やまんば)ガールズ」は、普段、地域で活動する民話の語り部を中心に30~80代の約40人が集合。芸術祭では、農作業の合間を取る食事「おこひる」を、もんぺ姿で民話を披露しながらふるまう地元色豊かなパフォーマンスが、人気を集めた。



海から信州に塩が運ばれるイメージ道中を土で辿って表現
.....
北アルプス国際芸術祭「土の道・いのちの道」(2017年撮影)

竹で描く波も、民話も、はっきり言って、生きるためには必要がない。でも、人の手で生み出される美しい造形や、語り継がれた話は胸に響き、心を豊かにする。こうしたアートの持つ豊かさと、心尽くしの手料理で客をもてなすといった地方の暮らしが生む豊かさとが響き合い、生き生きとした営みが育まれていくことこそが、地域型芸術祭が開かれる意義であると私は感じている。

■心豊かに、暮らし続けるために

5月末、4年ぶりに大地の芸術祭を訪れた。夏休みでもない、ゴールデンウィークも過ぎた週末の会場は人波もなく、静かだった。芸術祭の“成功”も、人口減少に歯止めをかけるものではなく、一帯はこの20年で人口が2割強減少し、旧市町村単位では5割近く減った地域もある。学生のとぎに出会った高校生も、就職や結婚で地元を離れた人が少なくない。

瀬戸内海の島では、芸術祭を機に移住者が増え、いちど子供のいなくなった小学校が再び開校したという話も聞こえてくる。でも、妻有はこの冬、4メートル超を記録した豪雪地。移住先として考えるには自然が厳しすぎる。

それでも、厳しいこの地に暮らし続ける人たちがいるのだ。今年の芸術祭でも、アート作品としてよみがえった廃校の歴史を愛おしそうに語ったり、芸術祭での出番を心待ちにしたりする地元の人たちに出会った。



廃校になった小学校の最後の生徒3人が主人公となり童話のように構成されている

大地の芸術祭
絵本と木の実の美術館
(2022年撮影)

この20年間で、アーティストや美術大学の学生が継続的に訪れ、住民との交流が続く集落が増えているとも聞く。たとえ、いずれ閉じていくかもしれない土地であっても、外に出た人たちの帰る場所を守りながら、最後まで絶望せずに心豊かに生を全うするためのヒントを示しているように思う。

初回の芸術祭で、私たちは展示を受け入れてくれた^{たいへい}太平集落で、「被爆柿の木2世」を植えた。毎冬、集落の人が雪囲いをして見守ってくれる柿の木は2階建ての民家の屋根に届くほどに成長した。この間、その実を干し柿にしたり、種から「3世」を育ててくれたり。この5月には、ふっくらとした柿の実を手書きした小石が3個、その根元に置かれていた。一時、誰によるものかは分からないが、ウクライナの国旗が書かれた小石もあったという。これからも育っていく柿の木が、地域に豊かさを添える力になるのならうれしい。

2世木の根元には、柿の実を手書きした小石が3個

大地の芸術祭
『時の蘇生』
柿の木プロジェクト
(2015、2022年撮影)



11 住み続けられるまちづくりを



会津若松市で実現するデジタル田園都市

1. スマートシティ 10年の歩み

会津若松市がスマートシティを目指した契機は、東日本大震災だった。総合コンサルティングの多国籍企業であるアクセンチュア日本法人が復興支援を表明し、2011年8月に会津若松市に拠点を設けた。海老原 城一^{えびはら じょういち}アクセンチュア・イノベーションセンター福島センター共同統括はこの時の事情を「アクセンチュアの日本進出50年の節目に、日本のために何ができるかと考えていた矢先に東日本大震災が起きた。自分たちができる支援はビジネスを作ること。2011年7月に会津若松市、会津大学と三者協定を結び、復興計画を立ち上げるところから始まった」と話す。その後、震災復興からスマートシティへと発展し、2013年には市の重点施策にも掲げられた。

日本国内では地域の課題解決のため2010年前後から自治体単位でスマートシティの取り組みが始まっており、この時点では決してトップランナーではなかった。しかし、会津若松市は着実に成果を上げながら取り組みを継続し、今では市内に整備したICTオフィス「スマートシティAiCT（アイクト）」に、全国から企業や自治体関係者などが年間100件ほども視察に訪れる先進地域として注目を集めている。

「間違えないでほしいのは、スマートシティは手段であって目的ではないということ」と海老原氏。会津若松市との協働が決まり、市長

と面談、そこで出された最も深刻な課題が人口減少だった。会津若松市は95年の13万7千人をピークに、年間約1千人のペースで減り続け、工場撤退などもあって雇用の場も減少していた。

そこで会津若松市、会津大学、アクセンチュアの産学官連携で考えたのが「会津ならではの「雇用の場の創出」である。情勢の変化でも撤退されない企業の誘致を目指した。コンピュータ・サイエンス専門の会津大学を強みにして、卒業生が活躍できる高付加価値企業が地元であれば、地域にとっても大学にとっても良い効果が生まれる。では情報産業が会津若松で起業、あるいは進出する必然性、つまり「会津ならではの」をどうすれば作れるか。たどり着いたのが、「情報」を軸にしたスマートシティだった。

日本は課題先進国	先駆けて課題を解決するためのチャレンジ	成果を世界へ
<ul style="list-style-type: none"> ・超少子高齢化 ・医療費の拡大 ・社会資本老朽化 ・エネルギー問題 ・低生産性 	① 一極集中から機能分散へ(自律・分散・協調)	将来高齢化が進むアジア諸国や先進各国へ成果・ノウハウ展開/貢献
	② 少子高齢化対策としてのテレワーク推進	
	③ 予防医療の充実のためのPHR(健康長寿国)	
	④ データに基づく政策決定への移行(オープンデータ・ビッグデータ・アナリティクス)	
	⑤ 高付加価値産業誘致と起業支援	
	⑥ 観光・農業・製造業の戦略的強化と生産性向上	
	⑦ 再生可能エネルギーへのシフトと省エネの推進	
	⑧ 産・官・学による高度人材育成	

デジタル・IoT・アナリティクス・AI・ロボティクス
オープン・プラットフォーム・シェア・ヒューマンセントリック

「会津復興・創生8策」

会津若松市、会津大学、アクセンチュアが議論を重ね作成した会津若松のスマートシティ計画の軸。企業誘致だけでなく、持続可能な都市づくりのため全方位の施策を掲げ、10年に渡る取り組みを現在も貫いている。

2012年には市民(希望者)を対象に省エネ推進プロジェクトを開始。これは電力使用量を時



会津若松市スマートシティ推進室 『「スマートシティ会津若松」の取り組みとビジョン』より抜粋

間ごとに把握し、参加する他世帯（構成人員ごと）と使用量を比較できランキングも表示されるもの。参加者は比較ができることで節電意識が高まり、時間ごとの消費量も分かるため生活スタイルを工夫できる。これによって最大27%の削減効果を出すことができた。

これを起点として2013年に会津若松市がスマートシティを施政方針として発表、2015年に市民向けの情報窓口となる「会津若松^{プラス}」（後述）を整備し、2019年に進出企業の拠点となるスマートシティAiCTをオープン。昨年、地域マネジメントの担い手として一般社団法人スーパーシティAiCTコンソーシアムを設立し、12月には岸田首相が視察に訪れている。



会津若松市への企業移転の受け皿「スマートシティAiCT」外観。1階はアクセンチュア福島イノベーションセンターが入居し、2階3階にはサービスを開発する地元企業、国内大手企業、グローバル企業が入居。

2. モデルは欧州のメディコンバレー

雇用拡大を目指したアクセンチュアがモデルとしたのは、デンマークとスウェーデンにまたがるメディコンバレーだ。バイオテック企業や製薬会社など350社が集積するEU最大のライフサイエンス研究と産業の集積を誇る。デンマークでは数十年にわたって国民一人ひとりの健康データが集められており、ライフサイエンス研究に非常に有利なことが企業を集めた。高等教育のレベルも高く、ライフサイエンス系の博士号取得者が毎年2千人生み出されている。国は臨床試験のための手続きを簡略化し、国民のうち年間10万人以上が臨床試験や製薬研究に協力している。こうした市民参加型のデータ集積が新規起業を促し、雇用、税収の面で国に貢献、広く国民に高度医療が提供されている。

もちろん日本の現行法制下では、会津若松市単独で同じことができるわけではない。会津若

松市は、行政、市民、地元企業や事業者がともに情報を活用し、新たな付加価値を享受できる基盤を整備し、進出企業に対しては情報基盤を新規開発や市場調査等の場として提供する。大きすぎず小さすぎでもない約12万人という都市規模が、むしろ実証実験の場としては利点となる。進出企業に対して提供するのは情報を活用する「基盤＝場」であって、情報そのものではないことに留意が必要だ。

3. 個人情報とは誰のものか？

2015年にサービスを開始した「会津若松+」は、市から市民への情報連携サイトのように見えるが、IDを登録することで表示される情報がカスタマイズされる。この仕組みを海老原氏は「ID登録をしなくても利用できるが、登録すればちょっと便利、さらに属性や興味関心事を登録すれば更に便利」と話す。この意図するところは、「個人情報はその人個人のもの」ということと「その個人が許容できる範囲で公開すれば、引き換えに得られるものがある」ということ。ウェブサービス等で個人情報を利用する場合、事前に本人の同意を求める「オプトイン」の考え方は近年進んできているが、会津若松市ではサービス開始当初から徹底してきた。



「会津若松+」のホーム画面

「会津若松+」に先行して実証実験として行った省エネ推進プロジェクトは、自身の属性と電力使用状況を公開することで他者の使用状況と比較でき、気づきと行動変容につながった。自分の個人情報を提供することが自分だけでなく公の利益になる、ということを実感してもらうためのものでもあった。

海老原氏は「会津若松+」とこれに乗るサービスを合わせて「都市OS」と呼ぶ。「iPhoneに、

iOSとAppStoreというプラットフォームがあるから開発者は優れたサービス開発に専念できる。しかしアップルのプラットフォームはアップルだけのもの。行政も市民も企業も参加できる公益のプラットフォームがあれば、行政サービスも企業が提供するサービスも、コスト削減だけでなく、利用者個人に寄り添い、地域づくりにも役立つ」と話す。現在、プラットフォームたる「会津若松+」のID登録者は約2万人、年間のユニークユーザー数は会津若松市の人口を上回る14万人(2020年度)と近隣市町村にも利用が広がっている。

ただし海老原氏はこれが一朝一夕に進むとは考えていない。「個人情報提供はセンシティブな問題で、何があっても絶対イヤという人がいて当然。オプトインの考え方を丁寧に発信し、理解の輪を広げていく」と言う。

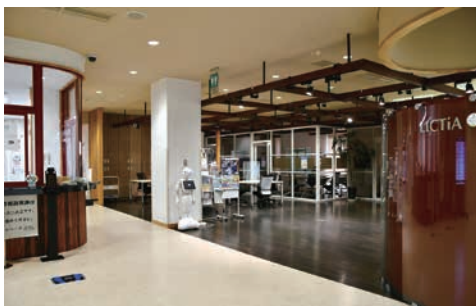
4. アルバイトはIT企業

コンソーシアムでは、市内に集積した企業環境を学校教育の場として活かす取り組みも進めており、即戦力になる人材の供給により企業進出を促す好循環を生み出そうとしている。

会津大学は、教員の外国人割合が4割、英語を共通語としており、大学院では留学生は5割を越す。

大学ではスタートアップにも力を入れ、これまでに送り出した大学発ベンチャーは公立大では最大の30社に上る。

高橋 健^{けん} 会津大学産学イノベーションセンター事務次長は「学生のアルバイト先としてのIT企業やITベンチャーは、スキルアップ、気付き、技術の実践などあらゆる面で非常に良い機会である」と話す。



会津大学先端 ICT ラボ LICTiA のイノベーション創出スペース。入居企業と学生、教員らが交流できる場。

5. 地域による地域のための地域データの活用

AiCTに拠点を置くソフトバンクの会津若松デジタルトランスフォーメーションセンターは市内で今年5月、地理情報などを用いて災害時に避難所への案内などを行う防災サービス「マイハザード」の実証実験を行った。このサービスは「会津若松+」にID登録し、個人情報利用に同意した人が使える、「都市OS」と連携した実証実験だ。

災害時、個人情報保護が壁となって要支援者の安全・迅速な避難を難しくしていることが、地域・行政にとっては長年の課題。「会津若松+」と「マイハザード」というサービスを使うことを通してオプトインが進めば、避難困難者がどこにいるかを把握できる。このため会津若松市は、「マイハザード」を個人情報の壁を突破するツールとして、町内会や自主防災組織単位で市民の声を聴きながら開発を進めている。



防災アプリ「マイハザード」を使うための説明会の様子。普段スマートフォンを使い慣れないお年寄りから「しっかり覚えたいから、もう一回教えに来てほしい」という声も上がったという。

キャッシュレス決済はすでに多くのサービスがあるが、決済手数料は小売店が負担しなければならず小規模小売店では導入が難しい。TIS^{※1}が提供するアプリ「会津財布」は、デジタル地域通貨の準備が進んでおり、従来小売店のみが負担していたものを、広く地域の企業や団体の負担に振り替える予定だ。

「会津財布」をダウンロードし決済に利用する場合、利用者個人は利用情報の提供に合意する(=オプトイン)。これが地域の共有資産となりオープンAPI^{※2}として地域のステークホルダーが活用できる。決済手数料を削減し、地域にデータとお金が還流する仕組みを新たに構築することで、持続可能な地域社会を守っていく仕組み。「マイハザード」、「会津財布」はいずれ

も、海老原氏が言う個人情報の提供が「自分だけでなくまちづくりにもなる」取り組みとなる。

6. 絶えず前へ

ここまで途切れずに取り組みが続いた理由を「市長の持続可能性に対する危機感の深さ。そして、わずか数年で達成できる目標ではないという共通認識のもと、話題性や派手さよりも、着実に目標に近づくための取り組みを積み重ねて成果を出し、理解の輪を広げられたこと」と海老原氏。

省エネ推進プロジェクトでは最大27%の電力使用量を削減し、国内海外で活躍するIT企業の機能移転を実現させ、AiCTと会津大学で46社400人の雇用を創出。この他に大きな成果として、「会津若松+」と同様の仕組みで海外からの観光客向けに「VISI+AIZU」というポータルサイトを公開し、2015年から19年の4年間で外国人宿泊客を7.3倍にしている。

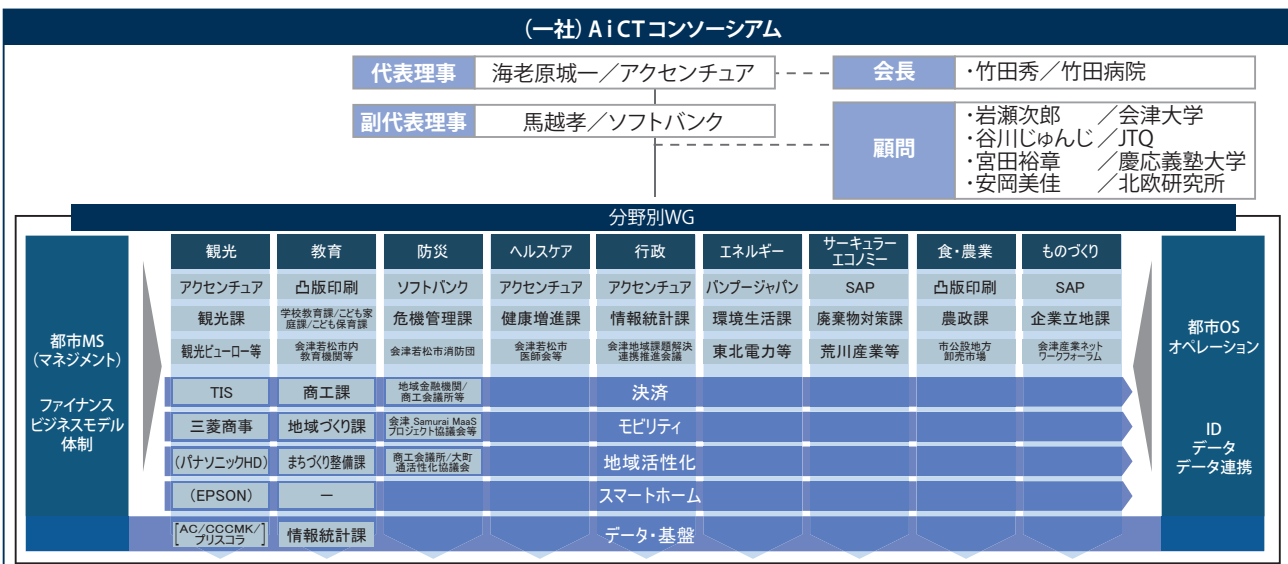
あらゆる取り組みに貫徹しているのは、「個人データはその個人のもの」という前提と、了解のもとに提供された情報は地域共有資産にするという考え方。アクセンチュアでは、これが

なければスマートシティ、Society5.0は成り立たないとして会津若松市で構築を進めてきた。結果として、近未来の課題解決にそれが不可欠であるという価値観を共有する企業が会津若松市に集まった。会津若松市で導入されている都市OSは、すでに神戸市など、8自治体地域に広がっており、今後、都市OS上のサービスの横展開も期待されている。

昨年8月に設立された一般社団法人スーパーシティAiCTコンソーシアムは78社の企業が参加しヘルスケア、観光、教育、食・農業など14のワーキンググループに分かれてそれぞれの取り組みを進めている。海老原氏は代表理事を務めている。「10年たってようやく部会ごとの活動ができるようになり、これから市民の皆様身近なサービス開発が加速していく。市民のオプトインに基づくデータ駆動型のスマートシティというビジョンのもと、産学官の連携で、できることを一つ一つ進め、会津から全国へ、世界へと広げていきたい」と話している。

- ※1 TIS (株) 東京に本社を置く国内大手のITサービス会社
- ※2 Application Programming Interface の頭文字。ソフトウェアの一部を公開して、他のソフトウェアと機能を共有できる仕組み

取材・文 橋本啓子



一般社団法人スーパーシティAiCTコンソーシアムのウェブサイトより(抜粋)

◆ 海老原 城一
 アクセンチュア福島イノベーションセンター・センター長 / 一般社団法人スーパーシティ AiCT コンソーシアム代表理事。東日本大震災以降自社の復興支援プロジェクトの責任者を務める。著書に「SmartCity5.0 地方創生を加速する都市OS」「サーキュラー・エコノミー・ハンドブック 競争優位を実現する」など。

8 働きがいも経済成長も	9 産業と技術革新の基盤をつくろう	11 住み続けられるまちづくりを	17 パートナシップで目標を達成しよう
---------------------	--------------------------	-------------------------	----------------------------

絶景は大地の躍動～佐渡ジオパークを歩こう

今年ようやく佐渡金銀山のユネスコ世界遺産国内推薦が決定し、注目が高まる佐渡。およそ400年に渡って採掘が続けられ、徳川幕府の財政を支えた金銀山は、圧巻の道遊の割戸を始めみどころは多いが、佐渡の魅力はこれに限らない。

2013年に日本ジオパークに登録された佐渡市は、ジオパークガイドとともに様々なスポットを巡ることができる、丸ごと大地の公園だ。佐渡にしながらハワイ島と同じ岩石が見られるポイントや日本列島の生い立ちに迫る地形など、佐渡には知れば驚く「ここにしかない風景」が広がっている。



大野亀頂上からの絶景。海岸沿いの佐渡一周線を走っても気づかないが、米作りが行われている海成段丘は標高およそ90m。かつて波に洗われて平らになった底が隆起してできた台地だ。

日本列島誕生の痕跡を見る

ユーラシア大陸の東端に、やがて日本海となる溝ができはじめたのが今からおよそ2000万年前、今は絶滅した大型哺乳類が繁栄していた頃のこと。この溝は、2018年にケニアの幹線道路を断裂させ現在も広がり続けているアフリカ大地溝帯と同様のものだ。大陸から離れた東端の欠片の多くは海底に沈み、再び隆起して日本列島になってゆく。

佐渡島は、最初の人類とされるアウストラロピテクスが生まれたおよそ300万年前、隆起によって海底から顔を出した。その後も隆起を続けて2つの島になり、島から流出した土砂がくになか国中平野をつくって一つになった。

海底から隆起した際、大陸から離れた時の痕跡はもちろん、大陸時代の旺盛な火山活動の痕跡、大陸になる以前の海底だった時代に海洋プレート移動に伴って付加した古い大地など、数億年分の痕跡を抱き込んで陸上に姿を現した。



大佐渡を代表する景勝地尖閣湾。ユーラシア大陸の東端にあった頃、地下から出てきたマグマが固まってできた地形。似た景勝地として東尋坊（福井県）があるが、あちらの縞模様は溶岩が冷える時にできる柱状節理（安山岩）による。尖閣湾は溶岩が押し出された時にできた模様をそのままどめた流紋岩。ジオパーク推進指導員あいでんくわい相田満久さんは「うねったところもあり、粘りのあるマグマを押し上げた大地の力をダイナミックに見せてくれる場所」と言う。



こちらは大佐渡の景勝地平根崎。この岩は石灰分を多く含む砂岩で、大陸から別れた溝が浅い海になった頃の暖流系の貝や哺乳類の化石を含んでいる。その後大佐渡の隆起で片側が引っぱり上げられたことで斜めになった。

■ 金銀をはじめとする鉱物の宝庫

相川鉱山は金銀だけでなくさまざまな鉱物が採掘されてきた。鉱脈の形成には、大陸の東端にあった頃の旺盛な火山活動が関係している。地下深部の高圧によって数百度に達した熱水に、地殻から金銀を含むさまざまな鉱物が溶け込み、その熱水が上昇する過程で水が沸騰蒸発した結果、生じたものだ。その後隆起して地表近くに現れたのが相川金銀山。有名な道遊どうゆうの割戸わりとは鉱脈が地表に露出していた場所で、鉱脈部分を掘り尽くしたため山が割れた景色に変わった。

佐渡には他にも複数の金銀鉱山があり、中世から知られていたのが西三川の砂金だ。上流の虎丸山が金の供給源だが、相田さんによれば「普通砂金は金鉱脈が風化してバラバラになったものだが、西三川は相川より二時間余分に掛かっている世界でも稀な場所」だという。というのも、虎丸山は鉱脈ではなく堆積物が隆起した山なのだ。金鉱脈が風化して砂になり、海の底に堆積し、隆起して山となり、再び風化して西三川川に金を供給した。

砂金は川底をさらって水で流すと比重の重い金が残るので容易に採掘できるが、鉱石に含まれる金は、まず石を砕いて粉状にしないと始まらない。鉱石の母岩は、昔から火打ち石などに使われてきた硬い石英。相川鉱山では、鉱石を粉にするために、佐渡で採れる2種類の岩石を石磨いしうすとして活用した。

まず上磨は吹上海岸の球顆流紋岩きゅうかりゅうもんがん。「球顆」と呼ばれる岩石中の豆のようなものは、「マグマに含まれるガスが抜けた空洞を石英（メノウ）が充填してできたもの」と相田さん。粒は硬く、それ以外はやや硬度が小さいので、結果的に紙ヤスリと同じような構造となっている。このような特徴をもつ球顆流紋岩は、回転させる側の上磨にはうってつけ。

そして下磨には御影石の名で知られる花崗岩。地下深くでマグマがゆっくり冷え固まってきた、大陸を形成する主な岩石だ。瀬戸内などでは一山丸ごと花崗岩というような巨大な塊も見られるが、佐渡では鹿野浦海岸に分布する片辺礫岩かたべれきがんから加工された。

片辺礫岩は、花崗岩の大小さまざまな礫が砂や泥、火山灰などと一緒に固まった、謎めいた姿をしている。これは、大陸東端が裂けた時に大陸を形成していた花崗岩が溝へ落ちて堆積したもので、日本海誕生の初期の段階を物語る岩石だ。



- ① 相川金銀山手前にある金山茶屋では、佐渡で採掘された金鉱石、これを砕いた石磨が置かれている。相田さんが指をさしているのは球顆流紋岩の上磨。
- ② 下磨に加工された片辺礫岩。2000 万年前、大陸の裂け目に落ちた岩の現在の姿だ。岩を割った時のくさび跡の右側の、赤みがかった部分が花崗岩。
- ③ 吹上海岸の球顆流紋岩拡大写真。直径1センチほどの粒は水晶やメノウなどケイ素を主とした結晶でできており、とても硬い。
- ④ 平根崎のホタテ貝化石。

■ 溶岩の島、黒の小木半島

小木半島は、隆起してできた大佐渡小佐渡と異なり、1400 万年ほど前の盛んな海底火山の爆発で流れ出したマグマが固まってできたもの。このため海岸付近はどこを見ても黒くガサガサした玄武岩だ。

小木半島のみどころは、歴史的建築群の宿根木集落の前に広がる宿根木海岸。玄武岩が波に削られて平らになった場所では、かつて塩作りが行われていた。比較的もろい岩石であるため、トンネルを掘ったり、獲った魚や貝を置いておく水槽を掘ったり、あるいは岸壁にさつまいも貯蔵庫を作ったりと、今も続く生活文化が見られるのも魅力。大地の運動から宿根木の町並みを眺めてみると新たな発見がある。

ちなみに、「はんぎり」とも呼ばれる「たらい舟」は、入り組んだ小木の磯で漁をするのに使われるようになったもので、佐渡でも使うのは小木だけだ。

さらに小木半島には、粘り気の少ない溶岩が海中に噴出し、丸い形になった枕状溶岩が有名だ。沢崎灯台の下には「たけのこ岩」と呼ばれる枕状溶岩が円錐状になった岩がぽつんとある。佐渡ジオパークガイドの祝雅子ほりまさこさんによると「昔は本当にたけのこらしい形だったんですけど、風化して先が折れちゃった」そうだ。模様を見るなら「くぐりいわ潜岩」。こちらも以前はトンネルだったのが道路拡張に伴って上部を落としてしまい、その面影はない。祝さんは地元の人から「珍しい大事な岩だって、教えてくれれば残したのに！」と言われたそうだが、地元の人にとってどれほど身近であるかが伺えるエピソードだ。

半島最西端にある「みこいわ神子岩」は、宝石がたっぷり含まれる岩石。黒い岩肌は近づくと日差しによってキラキラ輝く。含まれる宝石は黄緑色をした「かんらん石」で、大きな結晶になると8月の誕生石でもある宝石「ペリドット」と呼ばれる。これは地下のマグマが泥岩の中に入り込んでゆっくり固まり、その後隆起によって地表に現れたもの。地球内部のマントルに近い成分であるために大量のかんらん石を含む。結晶

そのものは約1～2mmと小さいが、小木半島ジオパークの目玉の一つ、佐渡にいながらハワイと同じ石が見られる面白い場所だ。

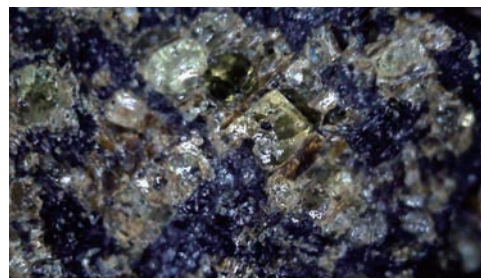


神子岩の前で神子岩の
でき方を説明する
祝さん

模様が鮮やかな枕状溶岩「潜岩」。
もとはトンネルのような岩だったが、
今はその一部が残っている。



神子岩の下にはマグマと泥岩の境界があり、
焼けた泥岩が見られる。泥岩の中で
神子岩が固まった証拠。



神子岩を拡大したところ。
黄緑色に輝いて見えるのが、かんらん石。

岩が風波に削られて平らになった場所は宿根木海岸のほか、相川地区にも「せんじょうじき千畳敷」と呼ばれる景勝などがあるが、沢崎はその名も「まんじょうじき万畳敷」。名に勝る佐渡島最大の隆起波食台だ。裂け目には小魚や海老がいて磯遊びも楽しめるが、夏に水位が上がると一面に青空と雲が映るため「佐渡のウユニ塩湖」と呼ばれている場所がこの万畳敷だ。



広大な万畳敷。隙間の水たまりではエビが泳いでいた

■ 佐渡ジオパークは現在進行形

佐渡ジオパークを楽しんでもらうためのジオパークガイドは現在 20 人ほどが登録しており、5 人まで（ガイド 1 名）なら 2 時間 3,500 円で依頼できる。モデルコースはいくつか設定されているが「湧水や棚田巡りなど要望に合わせて組み立てられるので、事前に伝えてほしい。そのためにガイドも日々学んでいます」と祝さん。

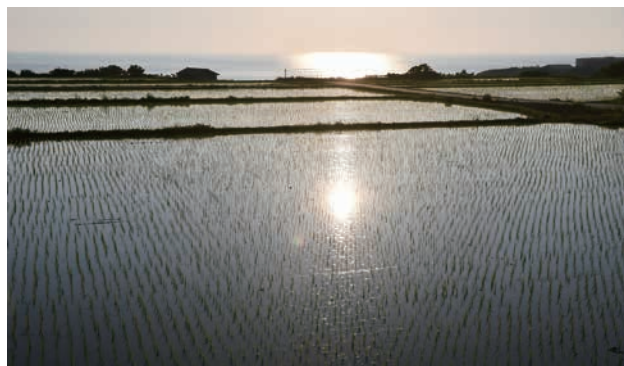
写真で見慣れた景勝地も、ガイドとともに巡り、岩をルーペで観察すると、まったく違う景色に変わる。



金山で栄えた相川は、護岸や石垣、庭石、いたる所に石。中には採掘された金鉱石もあり、石垣も時代によって積み方が異なり、それだけを見て歩いても楽しめる。



小佐渡岩屋山石窟の内部。海食洞で、かつては波打ち際にあったが、隆起によって現在は標高 70 m 地点にある。「青の石窟」として知られる琴浦石窟など、佐渡では海食洞巡りもできる。



波の作用で平らになった^{はしよくだい}波食台は、隆起して段丘(台地)となる。二見半島では 10 万年以上を経て 5 段の段丘面ができた。こうした段丘面は、江戸時代に急増した相川の人口を支えるため、横井戸や溜池で用水を確保し田んぼになった。尖閣湾の崖の上も波食台で、崖沿いの遊歩道を歩くと片側は田んぼ。ちなみに小佐渡では岩首の棚田などが有名だが、あちらは地すべり跡を開墾したもの。

取材・文 橋本啓子

問い合わせ先

佐渡ジオパーク推進協議会
〒952-8501 佐渡市両津湊198 番地
(佐渡島開発総合センター 2 階)
TEL: 0259-27-2162
<https://sado-geopark.com/>



特集「地域とともに」

ありがとうシェアリング—大学生が地域の困りごとを「ありがとう」に変える

NPO 法人オリヅルプロジェクト 理事 坂村 圭

1. 「オリヅルプロジェクト」のスタート

1-1. 活動実施の経緯とこれまでの課題

石川県白山市鶴来地区は、^{つるぎ}霊峰白山と手取川の自然の恵みをもとに、^{しらやまひめ}白山比咩神社を中心とした歴史と伝統文化を育み発展してきた。しかし、近年は、人口減少や高齢化率の上昇に悩まされており^{※1}、この結果として、地域の文化継承、自警団への参加率の減少などの日常的な暮らしの継続に不安を抱えている。

この鶴来地区で、地域資源の活用と新たな連帯の創出をもとに、まちの活性化に取り組む団体が、NPO法人オリヅルプロジェクトである。本団体は、鶴来地区において、事業者、大学教員、大学生との有機的な連携をもとに2018年から活動を開始し、これまでに空き家の解消、学生シェアハウスの運営、地域イベントの実施、地域コミュニティ活動への参加などに取り組んできた。特に、本活動に参加する学生の一部は、鶴来地区の学生シェアハウスに移住して、地域の祭りや町内会集まりへ参加するなど、地域の内部から地域課題の解決に貢献している。また、これまでに学生シェアハウスを大学生や地域住民に開放することで、延べ10か国以上200名以上の人々を新たに鶴来地区に呼び込んできた。



活動の拠点となる学生シェアハウス兼店舗

このように、NPO法人オリヅルプロジェクトは、地域事業者と大学生の共同によって、先駆的に鶴来地区のまちづくりに取り組んでいるが、その活動継続に課題がないわけではない。これまでに実施した事業は、単発・散発のイベントが多く、持続的な活動の継続に不安を抱えていた。また、活動の更なる展開に向けて、より多くの人々の参加や共感、さらには地域住民と大学生とのより密なつながりの創出が必要な状況にあった。

このような経緯から、(一社)北陸地域づくり協会の研究助成のもとで、本団体は「ありがとうシェアリング」という新たな活動を開始した。この活動の目標は、人と人、人と地域のつながりを育み、持続的に地域活性化の取り組みを継続するための仕組み・プラットフォームを検討し、団体が抱える既存の課題の解決に取り組むことである。次節以降では、本取り組みの具体的な目的、計画について、詳細に述べていく。

※1 白山市統計書(2020)によると、鶴来地区の人口は、2001年の4,436人から2019年に3,962人へと減少し、高齢化率は33.3%となっている。

1-2. 本活動の目的と概要

新たに取り組む活動である「ありがとうシェアリング」とは、鶴来地区のちょっとした困りごとを、大学生と一緒に聞き取り、解決して、「ありがとう」が行き交う日常を作り出すことを目的とした取り組みである。これまで、大学が近くにあるだけでは生まれてこなかった地域と大学との相互扶助の関係を積極的に生み出し、地域住民がいつまでも安心して暮らせる日常と、大学生が卒業後も第二の故郷として鶴来に

想いをはせる状況を生み出すことを目標としている。



大学生に鶴来別院を案内するメンバー

具体的な地域の困りごとには、寺社仏閣の清掃活動、山林の維持管理、お祭りの手伝いなどの地域に共通するものと、新たな店舗の開業支援や子供の遊び場づくりなどの個人的な関心から生まれるものが含まれる。このような地域の困りごとを、その解決やサポートを行える人材（大学生等）とマッチングさせて、地域内外の新たな人のつながりを生み出しながら、一つひとつ解消していくことが、本活動のねらいである。



大学生が企画したまちあるき
いっかんじまがいぶつ
(一閑寺磨崖仏不動明王を拝観)

1-3. 活動の計画について

上記活動の達成に向けて、2年間の目標を、取り組みを継続的に行なうための環境の構築と、実際に事業実施に取り組むことに設定した。具体的な活動計画とその内容は、次の3点にまとめられる。

(1) 持続的な活動に向けた環境整備

地域の困りごとの把握と課題解決を行う大学生とのマッチングを行い、持続的に地域課題の解決を行える体制を確立する。具体的には、本活動の周知と協力者募集のために、「困りごとカード」の発行、ホームページの開設を行う。また、解決を試みる課題の検討やマッチングは、Web会議を基本として、月に一回定期的に開催する。

(2) 事業の試験的な実施と周知

試験的に地域の困りごとの解決を本団体メンバーで行い、「ありがとうシェアリング」の取り組みを地域住民に周知する。具体的には、鶴来地区の良源寺の清掃活動を大学生と共に行う。また、これらの活動成果を、地域住民や小学校の教員に伝達し、今後の活動への理解や参加を求める。

(3) 本格的な実施

月に1回程度の頻度で、大学生と一緒に地域の困りごとを解決する。課題解決に関するイベントやワークショップの実施時には、本団体メンバーが付き添い記録をとる。

なお、上記の活動計画は、コロナ禍での目的達成のために、当初の計画を大幅に修正した結果である。当初の計画では、既にNPO法人オリジナルプロジェクトが所有している空き店舗空間をリノベーションして、その一部を地域住民と大学生が交流するスペースとして活用し、困りごとの把握やマッチングを行う予定であった。

しかし、感染症の状況を鑑みて、不特定多数の地域住民との対面接触を前提としたマッチングは困難と判断し、交流スペースの設置を諦め、その代わりに近隣住民、他活動団体、知人に個別に聞き込みを行い、地域の困りごとを収集することとした。また、活動への参加者を募ることは、ウェブ媒体での広報で代替し、打ち合わ

せや個別相談はWebを活用して行うこととしている。このように、活動をすべての人に関いて広く展開することはできなくなってしまったが、そのかわりに特定の地域の人と継続的に交流をすることで、当初に設定した活動の試行的な実施を試みている。

2. 「ありがとうシェアリング」の成果

本章では、2020年4月から2022年3月の間に、実際に行った活動の内容とその成果について記述する。

2-1. 持続的な活動に向けた環境整備の成果

地域の困りごとを把握するために「困りごとカード」をデザインして地域住民に配布した。このカードは、将来的には困りごとを壁に掲示して並べられるようにデザインしている。なお、その外面には団体のホームページアドレスなども記載しており、パンフレット代わりに活用することもできる。



困りごとカード

また、本団体の活動周知と地域の困りごとの解決に参加してくれる人の募集を目的に、ホームページを新規開設して情報発信を行った。このようなウェブ媒体が整備できたことで、地域住民からの信頼感や理解が獲得でき、後述するような、新聞やテレビなどでの活動掲載につながったと考えている。

【HP】 <https://orizuru-project.com>

環境整備の効果もあり、月に一回の頻度で開催する「ありがとうシェアリング」の実施検討会議（Web開催）には、団体メンバー（鶴来の事業者）6名、大学生（北陸先端科学技術大学院、金沢大学など）5名程度、鶴来活性化に興味のある若者5名程度の、計15名程度が常時参加している。このような活動を行うコミュニティが成長したことも大きな成果だと考えている。また、本団体がNPO法人格を取得したことも、持続的な活動の実施に好影響を与えている。NPOとして活動を周知することで、地域の既存団体（町内会、まちづくり組織など）とのつながりが新たに創出できた。

2-2. 事業の試験的な実施と周知の成果

事業の試験的な実施として、良源寺の清掃活動を2020年4月に行った。この活動のきっかけは、本団体メンバーの住職への困りごとの聞き取りであった。主に北陸先端科学技術大学院大学の学生に呼びかけを行い、当日は3名の大学生、3名の団体メンバーが清掃活動に参加した。小規模の活動の試験的な実施ではあったが、参加する大学生の活動への理解を促進し、地域住民や小学校教員などへの広報や周知が円滑に進むようになったと考えている。

2-3. 本格的な実施の成果

(1) 鶴来別院の清掃活動の実施

鶴来別院は大きな屋根や梁が特徴的な街の中心部に位置する寺院である。ここで、住職から寺社境内の清掃の困りごとの依頼を受けて、「ありがとうシェアリング」の一環として大学生と清掃活動を行った。当日は、清掃活動だけでなく、鶴来別院の内部の説明を行ってくださり、大学生の鶴来に対する理解も深まった。

また、この活動をきっかけに、本活動のイベント実施時に、会場として鶴来別院を無料で貸し出しただけするなど、新たな人のつながりを創出することができた。



鶴来別院清掃



鶴来別院で実施した
鶴来「楽しみ」学級



大学生とのリノベーション

(2) 若手起業家の新規店舗開業支援

近年は、若手起業家が増加してきているが、店舗開業のノウハウや、ある程度まとまった開業資金がない場合には、新規店舗を開業することは困難な状況にある。このような困りごとを聞きつけて、本団体メンバーが中心となって開業支援を行ったのが、鶴来地区にオープンした「Happiness」というアイス屋さんである。



Happiness 内部



この店舗は、本団体が運営する学生シェアハウスの一部(元の店舗スペース)をリノベーションして、月25,000円で場所を賃貸することで開業した^{※2}。なお、リノベーションの作業には、大学生も参加して、外構整備の手伝いを行っている。また、店舗運営などに関して、本団体メンバーが相談に乗るなど、新規店舗開業の経済的、心理的ハードルを下げるための支援も行った。現在、「Happiness」には多くのお客さんが訪れており、鶴来地区の新たな名所となっている。

※2 リノベーション費用は「Happiness」の負担で開業をしている。

(3) 「舟岡山城を守る会」の活動補助

舟岡山は、戦国時代の石垣の曲輪くるわが残る、鶴来の大切な地域資源の一つである。ここで、その整備保存と活用を行う団体が「舟岡山城を守る会」だ。この団体は、登山道の草刈りや周辺の整備に努めてきていたが、近年はその人手が不足しており、本団体に活動補助を依頼されることとなった。これまでに3回、「ありがとうシェアリング」の事業として、本団体メンバーや大学生が草刈り活動に参加している。



舟岡山の清掃活動

この活動支援がきっかけとなり、現在は「舟岡山城を守る会」のこれからの地域活動の展開を、本団体メンバーが協力して行っている。現在検討していることは、舟岡山のパンフレット作成、案内板の設置、ガイド企画などである。これらに関して再度依頼があった場合には、「ありがとうシェアリング」としての実施を考えている。

2-4. 大学生が「子供の地域学習イベント」を開催

大学生と共に「ありがとうシェアリング」を実施していくうちに、「主体的に地域づくり活動を企画・実施したい」という要望を受けるようになった。そこで、本団体が大学生の活動を支援する形で、新たなまちづくり活動の企画をスタートした。テーマとしたことは、地域からの要望も多かった、「子供の遊び場の創出」である。定例で行っていた会議の場で、大学生に何度も企画プレゼンをしてもらい、その発想力を活かして、「子供が鶴来のまちを遊びながら学習するためのイベント」を実施することを決定した。なお、本団体が協力したことは、企画に対するコンサルティング、イベントの広報（小学生の集客）、イベント実施補助、イベント開催費用の補助などである。

大学生が企画したイベント、「鶴来『楽しみ』学級」は、全3回実施された。最後に、地域向けの報告会も開催された。毎回5～10名の小学生が参加し、10名ほどの大学生が開催準備にあたった。

子供たちが鶴来のまちを楽しみながら学習できるように企画した「まちあるき」に合わせ、「鶴来まちあるきすごろく」、「七ヶ用水ゲーム」、「鶴来名所トランプ」、「鶴来名所塗り絵」などの遊びグッズを開発・制作し、体験してもらった。



北陸鉄道廃線跡を歩く

七ヶ用水を学ぶ

大学生は、この活動を行っていく過程で、任意団体「ココノコ」を設立している。これらの活動は、「Matching HUB HOKURIKU 2021 M-BIP」で「システムサポート賞」を受賞したほか、新聞やテレビで放送されるなど、大きな反響を呼んだ。



「鶴来名所トランプ」で大学生と遊ぶ子供たち



大学生が作った七ヶ用水をモチーフにしたゲーム

このように、「ありがとうシェアリング」をきっかけに、その枠組みを超えて、大学生が自主的に地域活動を実施するという成果が得られている。大学生の地域活動の企画コンサルティングは、来年度以降も継続的に実施していく予定である。

3. 「ありがとうシェアリング」の波及

3-1. 本活動のまとめ

この2年間を通じて、「ありがとうシェアリング」を行うための環境整備と本格的な活動の開始を行うことができた。これらの活動の成果は、以下の3点にまとめることができる。

(1) ちょっとした困りごとを話し合う場の創出

本活動のなかでは、清掃活動や子供の遊び支援など、これまであまり注目されてこなかった、地域のちょっとした困りごとの解決に着目してきた。このような困りごとの解決には大きなインパクトはないと思われるかもしれないが、地域のなかでちょっとした困りごとを簡単に相談できるような状況を作っていくことが、より住みよいまちへと成長していくためにとても重要なことだと考えている。この意味で、本活動を開始して、様々な人からの相談を受けられたことには一定の成果があっただろう。



まちあるきを企画した大学生と子供たち

(2) 大学生の自己実現の場として

本活動には、多くの大学生から困りごとの解決に協力してもらった。大学生の多くは、単に活動に参加するだけではなく、自ら企画をしたいと、試行錯誤しながらも、新たな活動に展開させていた。大学生の背中を少し押してあげることで、彼らが自分の考えを表現し、他者から評価を受けるといった体験を生み出したことは、本活動の大きな成果の一つであっただろう。

(3) 地域住民と大学生のつながりを創出

これまで地域住民と大学生が話し合いを行うことや、一緒に活動を行う機会は、非常に限られていた。しかし、本団体がハブとなり、地域住民と大学生がかかわり続けたことで、少しずつ信頼関係が生まれていき、最終的には、団体メンバーを介さないでも大学生が地域住民とが

直接関われるようになった。このように、地域住民と大学生の日常的な接触や情報交換の機会を創出していき、お互いが理解し、信頼しあえるコミュニティを育み続けていきたい。

3-2. 今後の展望

現在、「ありがとうシェアリング」の活動の一環として、企画を進めているのが「鶴来のお土産づくり」である。これは、地域住民から「鶴来らしさを活かして気軽に購入できるお土産があまりない」という声を聞いたことで取り組みが始まった。これまでに、鶴来の発酵文化を活かした、伝統菓子「辻占^{つじうら}」の新たな商品化の検討を開始している。本企画では、鶴来の和菓子屋や酒蔵のオーナーに商品開発への協力を求めており、ここでも、新たな地域のつながりの創出に挑戦している。

活動を振り返ってみると、コロナ禍という制約があったことで、活動内容の変更を余儀なくされた部分は少なくなかったが、その代わりに、特定の地域の方々と密に関係づくりができたのではないかと考えている。今までに築いてきたコミュニティを活用して継続的な活動を実施していくとともに、感染症の状況が改善した際には、より多くの人に参加できるイベントの実施へと舵を切っていきたい。また、本活動を通じての予想外の収穫は、大学生による自主的なまちづくり活動の開始であった。このような新たな活動の展開も積極的に推し進めていきたい。

最後になるが、このような活動の展開が行えたのは、(一社)北陸地域づくり協会からの支援もあったからだと強く思っている。ここに深く感謝の意を申し上げたい。

問い合わせ先

オリヅルプロジェクト 理事 坂村 圭
Mail : sakamura.kei.aa@gmail.com



会員だより

「令和4年春の叙勲」で受章された2名の方からご寄稿いただきました。
心からお祝い申し上げます。

瑞宝双光章

山崎 克志 氏 (新潟県新潟市在住)

元北陸地方整備局 用地部 用地調整官

事業用地確保に奔走していたあの頃

令和4年春の叙勲で瑞宝双光章の栄に浴しました。これもひとえに、建設省、国土交通省時の素晴らしい上司、先輩、同僚の皆様のお力添えのたまものと感謝申し上げます。

昭和49年3月30日付で羽越工事事務所用地課に配属され私の「用地屋人生」が始まりました。直営時代のなごりがまだ残っている時代で、用地のイロハを教わりました。公務員生活34年のうち本局勤務が12年、現場事務所が22年程になります。用地部担当者の時代は用地国債による先行取得制度がスタートした頃で、その事務処理に追われました。当時、河川においては魚野川の小出地区、高田の関川改修に伴う家屋移転、また道路は二次改築に移っておりバイパス事業が管内各事務所で競って行われ、用地国債が積極的に導入されました。その他、圃場整備事業（創設換地）や区画整理事業（管理者負担金）による道路用地の確保など協定に基づく事業用地の確保に追われた日々でした。また、生活再建措置として三者契約による代替地確保制度が発足したのもこの頃。

新潟国道、高田工事で道路の用地取得に奔走。新潟国道で安田バイパスや新潟西バイパス等に。高田工事では上新バイパス（中郷地区）、妙高野尻バイパス等に携わるが、雪深い地での用地交渉は関係者の方も粘り強く交渉に時間を要した。

そして平成元年に新潟国道に復帰し116号担当で再び新潟西バイパスの用地確保に。起点の黒埼地区と終点の高山・内野・曾和地区等の

取得を進めました。と同時に頭を抱えたのが市役所前の学校町交差点改良事業。区分所有マンションの建物本体が支障となる事業は全国的にも例がなく、どのような補償をやるか苦慮。また昭和町交差点改良事業は元商工会議所会頭の自宅や併設の保育園の補償等について移転先確保も含め対応に時間を要す。加えて万代島ルート都市計画決定に向けた地元説明等。新潟国道復帰後の3年間は「忙しかった」という記憶しかありません。

富山工事での2年間は、「2000年とやま国体」に向けた能越自動車道をはじめとした全県的な道路整備の為の用地確保。赴任して直ぐに会計検査。行政代執行の準備と実施。そして事業認定申請2件と告示。土地調書作成の為の収用法35条に基づく立ち入り調査2回（警察警備当局の助けを求む）。単年度の用地費及び補償費が100億越え、加えて用地国債60億（事務所長・副所長（道路）にもうこれ以上の予算はやめて下さいとのお願いもダメでした）。

56才で公務員生活にサヨナラし、建設弘済会（現地域づくり協会）を経て現在は民間の会社に。民の立場で用地取得のお手伝いをした柏崎バイパス、栗の木・紫竹山道路、朝日温海道路等の一日も早い供用、また千曲川・信濃川の流域治水事業の早期完工を願うだけ。この業界からの引退も視野に、半農半Xではないが新潟市と実家（五泉市）と半々の生活。稲作をやりながら田舎の友との語らいが心のやすらぎとなっています。



「早出川の環境を守る会」の友と

瑞宝双光章

柳沢 今朝次郎 氏 (新潟県新潟市在住)

元北陸地方整備局 北陸技術事務所長

人は城 人は石垣 人は堀

令和4年春の叙勲に際し瑞宝双光章の栄に浴し身に余る光栄に存じます。これもひとえに建設省、国土交通省の勤務を通じての上司、諸先輩、同輩をはじめ多くの方々からのご指導、ご支援のおかげと心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

信濃川水系砂防工事事務所姫川出張所をスタートに、その後、本局、本省、黒部、羽越、阿賀野川、神通川、北陸技術の各現場で多くの方々に支えられ、数多くの経験をしました。

荒川ゴルフ場はNTTのA型を活用し、公共施設の整備を条件に高水敷を活用したパブリックゴルフ場を造成することでした。用地問題が難しく難産なゴルフ場造りのスタートでした。

蒲原沢土石流災害は、姫川水系左支川蒲原沢で発生し、土石流により多くの尊い人命が奪われました。本局の対策本部に詰めていた私は、新潟労働基準局からの「労働安全衛生法に沿った対応をしていないのではないか」との指摘に対し、土木工事共通仕様書にのっとり労働安全衛生法を遵守して現場対応していたことを説明し、納得いただいたの決着となりました。

大河津分水路の改修計画(案)検討に当たっては、学識経験者、上司、先輩など多くの方々のご指導を受けながら継続して検討してきた改修計画の提案でした。洗堰を含めた改修計画の主テーマは、法線計画と土砂移動及び流下能力確保を考えた縦横断計画でした。当初の改修計画(案)は、右岸を掘削する計画でしたが、右岸は過去に大きな地すべりを起こしていたことを踏まえ左岸に法線を振ることとしました。

保倉川改修に関する裁判では、改修を進めるに当たり事業認定取り消し訴訟と松の木伐採事件の対応でした。必要川幅の確保に伴う土地収用法による計画と障害となった松の木の伐採を行ったことに対する裁判でした。被告は建設大臣でしたが、大臣の代理として法廷にも立ち、結果は勝訴となりました。

左俣谷雪崩災害は、神通川水系蒲田川右支川左俣谷で雪崩が発生し、完成検査のため除雪をしていた作業員2名が巻き込まれました。雪崩発生量は166万 m^3 (国内最大級)。救出に当たっては雨と外気温を踏まえ二次災害を避けながらの救出作業となり難航を極め、残念な結果となってしまいました。

幾つかの経験によって得た教訓は、戦国武将武田信玄公の言葉でした。『人は城 人は石垣 人は堀 情けは味方 仇は敵』。戦国時代も現在も人との繋がりが大切であることを教えてくれました。

この度の受章を励みに今までに得た経験を活かしていきたいと思えます。末筆になりましたが皆様のご健勝ご活躍を心から祈念しますと共に、改めて心からの感謝とお礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。



角田山 佐潟 私

伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間を見つけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
第26回 社会資本整備 セミナー	7月15日(金) 13:00～15:30	長野ターミナル会館 4F「芙蓉・寿」 定員30名	■講演 演題:「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師:北陸地方整備局 担当官 新型コロナウイルス感染拡大防止 につき、ご協力をお願いします。 ▶聴講には事前申込が必要です。 ▶新潟会場の聴講:1社1名 ▶富山・石川・長野会場の聴講 :1社2名まで ※感染症拡大の場合、人数制限を 行う場合があります。その際は 事務局より連絡いたします。	社会資本整備セミナー 事務局 (北陸地域づくり協会 企画事業部) TEL:025-381-1882 FAX:025-383-1205 締切:7月12日(火) ※定員になり次第、 受付を終了します。
	7月21日(木) 9:30～12:00	石川県地場産業 振興センター 3F「第3研修室」 定員60名		
	7月22日(金) 9:30～12:00	ポルファートとやま 4F「琥珀」 定員75名		
	7月27日(水) 13:30～16:00	新潟県自治会館 1F「講堂」 定員80名		
高瀬渓谷 フェスティバル2022	7月30日(土)	長野県大町市 大町ダム周辺	ダム内部見学、龍神湖巡視体験等	大町ダム管理所 TEL:0261-22-4511
第57回 地盤工学研究発表会 開会セレモニー・ 特別講演会	7月21日(木) 16:30～18:40	新潟市中央区 朱鷺メッセ	演題:「新潟の大地の生い立ちを フォッサマグナからひもとく」 講師:竹之内 耕 氏 (フォッサマグナミュージアム館長)	※申込不要 jgs_support@nacos.com
関屋分水通水 50周年記念 せきぶん誕生祭	8月10日(水)	信濃川下流河川事務所 関屋出張所周辺	スタンプラリー、特別開放(関屋出 張所・新潟大堰)、関屋分水VR体験、 降雨・地震体験、はたらく車の展示、 新潟大堰・信濃川水門ライトアップ等	信濃川下流河川事務所 調査設計課 TEL:025-266-7131
第20回 萬代橋誕生祭	8月27日(土)	新潟市中央区 萬代橋周辺	萬代太鼓演奏、キッズダンス、 萬代橋Tシャツ販売等	萬代橋誕生祭実行委員会 事務局(中央区建設課) TEL:025-223-7410
第36回 小松市民レガッタ	9月4日(日)	石川県小松市 梯川ボートハウス (前川水域)	ボート競技会 5クラスによる市民参加のイベント	小松市ボート協会 komatsu.city.rowing @gmail.com

新型コロナウイルス感染状況にともない、実施内容を変更する場合があります。事前にお確かめの上、お出かけください。

編集後記

今年の夏は、新型コロナウイルスの影響で中止になっていたイベントが再開されたり、移動制限がなくなり、夏休みの計画にわくわくしている方も多いだろう。今号掲載した「越後妻有 大地の芸術祭」の鑑賞、ユネスコ世界遺産に国内推薦され注目を集めている佐渡への旅行はいかがだろう。

6月17日、会津若松市は、震災後11年に渡る「スマートシティ構想」の取り組みが評価され、デジタル田園都市国家構想推進交付金(Type3)に採択された。雇用の場を創出したいという取組は、「都市OS」という会津の情報文化をつくり、新しい地域づくりを発信している。

デジタルの活用となると、データ入力が必要。スマートフォンと睨めっこしながら、ようやく完了に至ることもある。こんな時、近くを手助けしてくれる大学生などがいたら心強い。「ありがとうシェアリング」でIT講習会を開催してくれたらと思った。

防災面でもデータだけでなく、ソフトなつながりがあればより充実した体制がつけられるだろう。(事務局)



(一社)北陸地域づくり協会は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

地域づくり in ほくりく 第28号

発行 令和4年7月4日
 編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
 〒950-0197
 新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
 電話 (025) 381-1160
 FAX (025) 383-1205
 HP: http://www2.hokurikutei.or.jp